

蘭学から英学へ

—津田仙を通して—

堀本文子

Abstract

This paper examines the process how English study replaced Dutch study, which was the main source for getting Western knowledge, cultures and technology during the Tokugawa period. In doing so, the paper focuses on Sen Tsuda (1837-1908), who was one of intellectuals living in the same period as Yukichi Fukuzawa (1835-1901). Sen Tsuda is known as the father of Umeko Tsuda (a pioneer of women's education), but he is less-noted in general Japanese history. Yet, he was a well-known agriculturist at the time and made great efforts for the modernization of Japan, just like Fukuzawa. In opening up Sen's life, the acquisition of English language played an important part. It is quite intriguing for us English teachers to look at Sen's touching efforts to learn English at the time when it was difficult to get helpful dictionaries. The paper sheds light on his painful efforts by citing his own writings in the journals published at the time. We will also examine how the mastery of English contributed to his achievements in his later life.

1. はじめに

英語教育をはじめとしてすべての教育は各時代のさまざまな要請を反映していると思われる。江戸時代には、西洋の学術・文化・技術を得る窓口は長崎とオランダ語だった。だが、時代はやがて、開国を契機として、蘭学から英学へと移っていく。

現在のように辞書が充実しているわけではなく、また英語を教える者もあまりいなかった時代に英語を学ぶことはどのようなものだっただろう。当時の知識人の一人である津田仙の涙ぐましい努力を調べることは、語学を教える者にとって非常に興味をそそるものである。

本稿では、津田仙自身及び同時代人の著作物を見ながら以下の3つの疑問を軸にして、外国語の習得により津田仙が人生を切り開いていく過程を見ていきたい。

- ・なぜ蘭学から英学に移ったのか？
- ・津田仙をはじめとする当時の知識人はどのようにして英語を学んだか？
- ・津田仙にとって英語習得はどのような意味を持ったか？

今回津田仙を取り上げたのは次の理由による。津田仙（1837-1908）は、女子高等教育に貢献した津田梅子の父親であり、満7歳の娘の梅子をアメリカに留学させたことで知られるが、日本史における知名度は、それほど高いわけではない。しかし、仙は、福沢諭吉（1835-1901）と同じ時代を生きた知識人であり、当時よく名前を知られた農学者でもある。福沢が慶応義塾を設立したように、仙も学農社農学校を設立している。仙は、農業の近代化と地方の経済の発展に尽力し、朝鮮の農学者やキリスト者との交流を通じて朝鮮人との相互理解に努力した。このように津田仙は、国権論や脱亜論を唱えた福沢とは違った方法で日本の近代化に構想し、実践した人であると言える。また彼は、筆者が現在住む千葉県酒々井町にあった佐倉藩出身の郷土の先覚者でもある。

2. 蘭学の発達

「我国に洋学の始まったのは、所謂切支丹宗の僧侶が来た時にある」と津田仙は、イエズス会のフランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier, 1506-1552）が1549年にキリスト教を日本に初めて伝えたときが洋学の始まりであると述べている。「其時分に伝わった葡萄牙語で、今日も残って使用されているものがタントある、このタントといふ言葉や、またシャボン、パン、またアリガタウ、カンテラ、セッタなども葡萄牙語から来ている」と言う¹⁾。

その後江戸時代に幕府は、いわゆる「鎖国体制」下でヨーロッパとの貿易をオランダ1国に限り、その窓口を長崎の出島に限定していた。しかし幕府は、海外事情に無関心だったわけでは決してなく、オランダに対して海外情報を定期的に提供させていた。これは「オランダ風説書」と呼ばれるものであり、オランダ商館が建てられた翌年の1641年からヨーロッパ諸国の情報が幕府に伝えられていた。オランダ商館長は甲比丹とよばれ、毎年江戸に赴いて将軍に拝礼することになっており、そのとき活躍したのがオランダ通辞とよばれる通訳官で、蘭学の普及に大きな貢献をした。

西洋の学術研究はキリスト教の禁止と「鎖国体制」の強化によって困難であったが、オランダ商館を通じて西洋の科学技術がしだいに学ばれていった。蘭学の発展は、元禄年間（1688-1704）に西川如見（1648-1724）が『華夷通商考』を著して世界の地理・風俗を紹介するとともに、新井白石（1657-1725）が、日本潜入をくわだてて捕えられたイタリア人宣教師ヨハン・シドッチ（Giovanni Battista Sidotti, 1668-1715）を訊問した記録をもとに『采覧異言』と『西洋紀聞』を著したのが始まりである。

第二段階として、8代将軍徳川吉宗(1684-1751)がキリスト教と関係のない漢訳洋書の輸入を許し、実学を奨励したことによって蘭学は急速に発展した。青木昆陽(1698-1769)は、1735年に発表した『蕃薯考』が将軍吉宗の目に留まり、蘭語学習を命じられた。「此青木と云ふ人は、長崎から、甘藷を携へて帰り、江戸近郷に植付ることを奨励した故に、同人死後に……「甘藷先生之墓」と云ふ墓碑を立てて、報恩のしるしとした」と仙は記している²⁾。野呂元丈(1693-1761)は、オランダ語の本草書に基づいて『阿蘭陀本草和解』を著し、本草学に業績を残した。

田沼時代の1774年には、杉田玄白(1733-1817)・前野良沢ら(1723-1803)がオランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』を訳して『解体新書』として刊行した。志筑忠雄(1760-1806)は、ニュートン力学を研究し、『曆象新書』として訳したりしている。平賀源内(1728-1780)は蘭学全般を学び、エレキテル(摩擦発電装置)の修理や寒暖計を発明した。このようにオランダ語を媒介に西洋医学・学術が研究された。

江戸時代も後半になると、佐倉藩主の堀田正睦(1810-1864)をはじめ、「蘭学に傾倒する」大名も現れ、その支援によって、蘭学がいつそう盛んになった。蘭学に理解を示す堀田正睦が佐倉藩主になったのは、1825年3月、津田仙が16歳のときだった。正睦は、後に水戸藩の藩主徳川斉昭から「蘭癖」(オランダかぶれ)とあだ名されたほど蘭学を奨励し、多くの藩士に蘭学を学ぶことを奨め、積極的に洋書を揃えていった³⁾。また、蘭学を盛んにするため、蘭方医佐藤泰然を佐倉に招いた。泰然が佐倉に移住したのは、1843年8月のことで、この10月に順天堂が開設されている⁴⁾。泰然は、佐倉城下で順天堂病院を経営しながら蘭学を教える私塾を開いた。江戸からも入門する者が多く、大阪の緒方塾と肩を並べたといわれる。このような佐倉藩の開進的な気風が津田仙をはじめとする藩士に洋学への向かわせた要因になったと考えられる。

3. 蘭学から英学へ

3.1 幕府の対応

このように江戸時代においては、海外情報のみならず、西洋の学術・文化・技術を得る窓口は、主として長崎とオランダ語だった。蘭学の発達とともに、蘭学者の間に合理的な思考が発達し、鎖国政策に対する批判的な考え方も生まれてきた。そこで幕府は技術的知識を学ぶことで体制の補強を図るため1803年以降、浅草の天文台で洋書翻訳の事業を始めた。1811年には、天文方高橋景保(1785-1829)の建議により蛮書和解御用を設け、フランス人ノエル・ショーメル(Noel Chomel)の百科事典の蘭訳本を『厚生新編』として訳出した。

幕府の命により英語学習が始まったのは、1808年秋のフェートン号事件がきっかけであり、幕府は翌年、オランダ通詞たちに英語学習の命を下している⁵⁾。このとき幕府は、オラ

蘭学から英学へ

ンダ通詞にロシア語の修学も命じている。これは、当時日本の北辺を狙っていたロシアを警戒しての措置であり、国防が語学学習の大きな動機になったことを示している。

1853年のペリー来航、それに伴う開国、1858年の日米修好通商条約の締結により英語の重要性が増してきた。1855年には蛮書和解御用が独立して九段下の洋学所となり、ここに洋学者が集められて幕府の統制下で科学技術の研究・教授、外交文書の翻訳・出版が行われるようになった。洋学所は、翌年の1856年に蕃書調所と改称した。1862年には一橋門外に移って洋書調所となり、翌年開成所と改称され、のち東京大学へと発展している。

幕府は1862年、オランダに軍艦を注文するため⁶⁾ 開成所で教えていた榎本武揚（1836-1908）など15人の留学生をオランダに派遣した。これが「日本から外国へ留学生を出した初め」だった⁷⁾。「黒船来航」として知られる1853年6月に浦賀沖に現れたアメリカ軍艦を目の当たりにして幕府は、国の国防力の強化の必要性に迫られたのである。

3.2 津田仙と西洋との出会い

津田仙は、1837年（天保8年）、下総国（現在の千葉県）佐倉城内で藩士小島良親の四男として生まれた。父、良親は佐倉藩主堀田備中守正陸の家臣で、藩の勘定頭元締の職にあり、禄高百二十石を受け、佐倉藩主の財政を預かっていた。仙が生まれた天保8年は、2月には大塩平八郎の乱、7月にはモリソン号事件が勃発しており、国の内外に変革を迫る足音が高まってきた時代だった。

幼少時代の仙は、学問より武芸に熱心であったようで、8歳で藩の学校の西塾に入り、習字・四書・五経の素読、小笠原流の礼法の大意などを学び、15歳で温故堂に入り、『日本外史』、『通鑑』、『漢書』などを学んだが、書物より武芸の方が好きだったようで、手記で以下のように記している。

「城門の内外に東塾・西塾の二つの学校を設け、藩中の子弟の城門の内なるものは、西塾に入り、外なるものは東塾に入り、十五歳になれば、その内の有志は温故堂に入るなり。東西両塾は小学にして、温故堂は大学なり。東西塾に各々凡そ百人許りの生徒ありて、十人一組となし、生長一人づつ置く。余十三にして生長になりし故、身体最も小さく「こまめの生長と綽名せられたり」⁸⁾

さらに温故堂の修学時代について次のように記している。

「私塾の先生に通ひて漢書を学びたるが、覚え至つて悪しく、父母の折檻によりて漸やくまなびたり。之に反して武芸は至つて好にて、馬術・剣術は殊に達人の内にも加へられたり。」⁹⁾

開進的な藩主の影響もあり、西洋に対する関心を深めたが、特に、藩が導入した西洋の砲術に強い関心を示している。だが、仙にさらに大きな衝撃を与えた西洋との出会いは、1853年6月ペリー提督 (Matthew Perry, 1794-1858) 率いる黒船を目にしたことである。当時仙は、江戸湾警護のための砲兵隊に配属されていた。このとき仙はまだ17歳の若さだったが、米国艦隊の非常にすぐれていることを知り、海外の事情を学ぶことの必要性を痛感した。そのためにもまず必要なのは洋学であると考え、青雲の志を抱いて江戸に上った。仙は、このときのことを次のように述べている。

「須らく洋学を研究すべし一日遅ければ一日損ありと乃ち江戸に出で百事を抛って洋学に志す」¹⁰⁾

仙は、1857年春、江戸に出てまず同藩の手塚律蔵¹¹⁾の蘭学塾に入門した。仙はここで一年間オランダ語の文法を学んだ。しかし、時勢が蘭学よりも英語に推移していると感じ、英語を学ぶことを決意する。福沢諭吉を初めとする当時の蘭学者たちも一様にこのように感じたようである。長崎に遊学し、適塾で蘭学を学んだ諭吉が、外国人居住地となった横浜でオランダ語が全く通じず、看板さえ読めずショックを受け、それ以来英語の重要性を痛感したという話はよく知られている¹²⁾。

3.3 仙の英語修得法

仙は、手塚の塾で蘭学を学んでいたが、仙の学びたかったのは英語だった。しかし、そのころ江戸にはまだ英語を教える者がいなかった。当時江戸で英書を読むことができたのは、漂流してアメリカ人に助けられ、アメリカで勉強して帰国した中浜万次郎 (ジョン万次郎, 1827-1898) だけだった。だが、彼は弟子をとらなかつた。ちょうどそのころ手塚塾の同窓、西周¹³⁾ (1829-1897) が英語の小文典『初等英文法問答』*The Elementary Catechisms, English Grammar* を手に入れた。これは、中浜万次郎がアメリカから持ち帰ったものである。仙は早速西周のところに行って、それを借り受け、全部を手写した。手塚はまもなくこれを『英吉利文典』として出版した。仙は、当時としては唯一のピカード (H. Picard) の英蘭対訳の辞書 *A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages* (1843) を頼りに『英吉利文典』解説しようと思った。この辞書は、「値段は三両二分」であり、「親から三両二分貰って、この本を買った時の嬉しかった事」と仙は回想している¹⁴⁾。仙は、当時の「書生と云ふものは、実に苦学したもので、私が手塚の塾にいた時などは親から毎月一両貰って、これで食料や小遣銭にしたものだ¹⁵⁾」と述べているから、この辞書は仙の3ヶ月分の生活費に相当したようである。

研究の苦心は『蘭学事始』の記事そのままともいべきもの¹⁶⁾で、一字一字の蘭訳を探

し、その蘭語を和訳し、やっと一語の意味を理解するという状況だった。ときには1ページを訳すのに2カ月余りもかかったが、それでも全体の意味は、はっきり理解することができなかった。仙は、この文典と格闘した頃を次のように述べている。

「この文典を読むのに、一字一字かのピカルトで引くが、意味につけた蘭語からして分からない。でまたそのらんの訳を引く、それで読んで見るけれど、どうしても通じない。半日ぐらい座禅をして考えるけれど、何の事だか解らない。今でも覚えているが、こういうことが書いてあった。

“…dialects differ from the standard…”

という文句があった。この「スタンダード」という文字を辞書で引いてみると「フラフ」(Du. Vlag, = flag) という註がある。そこで「方言は旗から違う」といっても、ちっとも解らない。また「本営」という註もある。で、「方言は本営から違う」これでも分からない。また座禅だ。が、いくら座禅したって、解る筈のものではない。正そうにも先生はなし、コンナ困ったことはなかった。かくしてドウヤラ、コウヤラ読みこなし、半年ばかりかかって、極小の文典を1冊読んだ。初の洋学書生というものは、皆このような困苦をしたものである」¹⁷⁾

そんな状態なので、発音などは全くわからなかったようである。white という時があるとオランダ語流に「ウヒイツテ」と読んでいた、と仙は述べている。やがて仙は、蘭方医伊藤貫斎が神田神保町に英語塾を開いたということを知り、早速、その塾に入門した。伊藤貫斎は、米国総領事タウンゼント・ハリス (Townsend Harris, 1804-1878) が熱病にかかり、かなりの重態に陥った際、その治療に当たった医者である。彼はそのとき、ハリスと同行した通訳ヒュースケン (Henry J.D. Heusken, 1832-1861) から英語を学び、その後英語塾を開いたのである。この塾で英語を教わって初めて、white は「ホワイト」と読むのだと聞いて驚いたという。また英語には発音しない文字があることを知ったのも、この塾を通じてであった。「私等はこの塾で、やっと音を知り、また単語なんか習って、少し道がついたのだ」と仙は述べている¹⁸⁾。

さらに1859年、仙は、当時英語の勉強が最も盛んだった横浜へ出て、英語で知られている福地源一郎 (1841-1906)¹⁹⁾ の塾を訪れ、その門下生にしてもらった。そこで当時蕃所調所の教授をしていた松本弘安 (寺島宗則) らと知り合い、共に英語の修得に勉めた。その後、仙は1860年、一旦江戸に帰ったが、再び横浜に出て、森山多吉郎 (1820-1871) の塾に入った。森山は、もと長崎の通詞で、漂流して長崎に滞在していたアメリカ人のラナルト・マクドナルドから英語を学んだ²⁰⁾。福沢諭吉も森山から英語を学ぼうとしたが、森山は通辞の仕事で忙しくなかなか教えてもらえなかったと自伝で嘆いている。「森山と云ふ先生は何も

英語を大層知って居る人ではない。漸く少し発音を心得て居ると云ふ位。とても是れは仕方ないと余儀なく断念」と述べている²¹⁾。当時英語を学ぼうとする者にとって英語の先生を探すのは一苦労だったようである。

3.4 洋学をめぐる当時の状況

世に先がけて洋学を学び、星雲の志に燃えていた仙だったが、英語の学習に苦労だけでなく、洋学を学ぶこと自体によって身に危険が及ぶ恐れもあった。その頃の日本は、攘夷論の絶頂時代で、尊皇攘夷派による外人殺傷事件も頻発していた。

前述のハリスの通訳ヒューズケンは、1861年1月初めに浪士に殺された。翌年1862年1月には坂下門外の変、8月には生麦事件、12月には英国公使館焼払い事件、翌1863年には4月には長州藩の下関海峡通過外国船の砲撃、7月には生麦事件報復としての英艦隊の鹿児島砲撃、翌1864年8月には前年の外国船砲撃の報復として米英仏蘭四国連合艦隊の長州攻撃などの事件が相次いで起こっていた。騒然とした世情の中で、攘夷派の怒りは外国貿易業者からさらに洋学者にまで及んだ。欧州各国をめぐる1862年末に帰国した福沢諭吉は当時の状況を以下のように記している。

「兎にも角にも日本國中攘夷の真盛りでどうにも手の着けやうがない……外国の貿易をする商人さへ店を仕舞ふと云ふのであるから、況して外国の書を読んで、欧羅巴の制度文物を夫れ是れと論ずるやうな者は、どうも彼輩は不埒な奴ぢや、畢竟彼奴等は虚言を吐て世の中を瞞着する売国奴だと云ふやうな評判がソロソロ行はれて来て、ソレから浪士の鋒先が洋学者の方に向いてきた」²²⁾

仙の師、手塚律蔵も1862年12月20日、開国論主張のため、長州藩士に襲われ、危うく生命を失うところ危機を脱し、佐倉に亡命している。

4. 津田仙にとっての英語修得の意味

4.1 幕府役人として渡米

ともかく仙のこうした熱心な勉強が認められ、やがて彼は幕府外国奉行（1856年7月設置）の通弁に採用されるに至り、これが世に出る転機となった。手記には、1862年4月に「通弁相勤め候ふに付五人扶持を賜はる」と記されている²³⁾。幕府は、アメリカに続き西欧各国から通商条約の締結を迫られ、外国語のできる人材を必要としていたのである。

仙は1861年7月、25歳のとき、幕臣津田大太郎の婿養子となり、牛込御徒町の津田家にはいった。仙は、大太郎の末娘初子を妻に迎えている。1862年には長女琴子が生まれ、2年

後に梅子が誕生している。

梅子3歳の年、1867年（慶応3年）1月、仙は幕府の勘定吟味役小野友五郎の随員として渡米した。随員には、福沢諭吉も含まれていた。軍艦2隻の注文をめぐる問題の結末をつけるのが渡米の目的だった。この渡米の旅はわずか半年の短いものであったが、この旅での見聞が仙の生涯の大きな転機となった。

米国への旅行中、仙は米国の軍事・産業・学術等あらゆる面にわたって深い感銘を受けたが、とりわけ心を打たれたのは、農業が「学理的」に行われていることと、国民が四民平等であって、尊卑の区別がないことであった。女子教育に関心を持ったのもアメリカで女性の社会的地位に感銘を受けたからだと思われる。

仙は、この旅行のみやげにヘンリー・ハーツホン（Dr. Henry Hartshorne）著の医学書 *Essentials of the Principles and Practice of Medicine*（1867）を持ち帰った。この書物は桑田衡平によって訳され、『内科要摘』と題して1872年に出版された。当時、医学といえば漢方か蘭方であったためこの書は人気を呼び、1893年までに発行部数2万5千に及んだ。この翻訳がきっかけになってヘンリー・ハーツホンは日本を二度にわたり訪れ、1897年に亡くなるまで日本に住んだ²⁴。

仙がこの旅から帰国してまもなく10月に大政奉還があり、しばらく明治維新の混乱が続いた。この間、仙は、幕臣として働き、洋学を教えていたようであるが、家族を江戸に残したまま新潟・会津・北陸、さらに長崎にも赴いている。1868年9月には、仙は江戸に戻ったが、明治と年号が改まると一切の官職を退いて、民間で新しい仕事を見いだそうと決心した。

4.2 仙の新事業

1869年（明治2年）、仙は築地の「ホテル館」に勤めることになった。このホテルは、1867年9月着工、翌年の夏竣工した建物で、当時、外国人旅客のために設けられた唯一の洋風旅館で、貿易所も兼ねていた。仙は、「ホテル館」に勤めていて、外人の食用に供すべき新鮮な野菜がなく、すべて缶詰で間に合わせているのに気づき、西洋野菜の栽培を思いついた。彼は、幕府没落後、地価が暴落した麻布本村町に土地を買い入れ、米国から取り寄せた野菜種をまきつけた。機を見るのに敏な仙ならではのことである。アスパラガスの栽培に成功し、林檎を移植し日本に広めたのも仙である。また和蘭苺（オランダイチゴ）の試植もしている。

麻布の農園には、アスパラガス、りんご、オランダいちご、その他西洋野菜の栽培を試みていた。日本では初めての試みであったので、栽培には思わぬ苦心を重ねた。試行錯誤の末、栽培事業は次第に成績をあげていき、仙は地所を買いひろめて、広大な農園を経営するようになった。いちごやグズベリーなどが熟することともなると、幼い梅子は毎日のように農園

に出かけたという²⁵⁾。

1871年(明治4年)9月、仙はそれまで勤めていたホテル館をやめて、開拓使の嘱託となった。まもなく、アメリカの農場経営者で前農務長官のホーレス・ケプロン(Horace Capron, 1804-1885)が来日し、北海道開拓長官の黒田清隆(1840-1900)との間で、女子留学生派遣の話がまとまった。仙はその計画に賛同し、梅子を留学させることにした。総勢5人の女子留学生の中で梅子が最年少で満6歳のときだった。仙は、梅子がアメリカに向けて出発するのを横浜で見送り、饒別に『英語入門書』と『英和小辞典』を贈った²⁶⁾。1872年4月、仙は、梅子が世話になっていたランマン夫人から妻の初子宛に来た手紙を『新聞雑誌』40号に翻訳して発表した。1879年5月1日、中村正直の同人社女学校の開校式で「婦人は国の基であり、したがって女子教育は今日もっとも大切なことである」という挨拶をしている²⁷⁾。

4.3 農業三事の出版

仙は、1873年(明治6年)1月、オーストリアのウィーンで開かれる万国博覧会に副総裁として出席する佐野常民(総裁は大隈重信)に三等書記官として随行し、ウィーンに着いてからは審査官に任ぜられた。彼はこの旅で大いに見聞を広めたが、とりわけ啓発されたのはオランダの農学者、ダニエル・ホイブレンク(Daniel Hooibrenk)の指導を受けたことだった。仙はホイブレンクの口述を記録し、大事に持ち帰った。

1874年(明治7年)5月、仙はウィーン滞在中に持ち帰ったホイブレンクの口述 *Method of Cultivation, Explained by Three Different Processes* を訳し、『農業三事』と名づけて出版した。この書物は農業改良の三方法を記したもので、当時としてはすばらしい新知識として迎えられ、たちまち数万部を発行するほどの売れ行きを示したという。当時福沢諭吉の『学問のすすめ』、『世界国盡』が一般人民の間に広く普及したように、「予の『農業三事』は農業家の間に泰西農事の新知識を普及せるに、大に貢献する所ありたるは、切に予の喜びとするところなり」と仙は自負している²⁸⁾。

仙は『農業三事』で示した3つの方法中、第3の花粉媒助法を応用するための「津田繩」と呼ばれる農具を開発した。これは、当時すばらしい新発明として全国的に広まった。初子は、1876年3月24日付の梅子への手紙に次のように記している。

「其外津田繩と名づけ候農具出来、日本国中に遣はし候。右キカイは米・麦など沢山みのらせ候道具に御座候。このキカイをこしらへ候は女子にて、女工場を相建て、昨今は日に約千本出来、女工毎日式百人余も通ひ居候。」²⁹⁾

1877年夏、仙は津田繩による稲花媒助方の実験を明治天皇、皇后、皇太子の天覧に供し

蘭学から英学へ

ている。しかしその後、科学的な有効性が問題となり、次第に購買者が減り、農業界から顧みられなくなった。

4.4 学農社農学校の設立

『農業三事』の好評に力を得て、仙はさらに、西洋農学の本格的普及を志し、1875年7月、同志らと農学校の創立を計画し、翌1876年1月には学農社農学校を麻布本村町に開設した。W.クラークによる札幌農学校設立の1年前のことである。この学校は一時、福沢諭吉の慶應義塾、中村敬宇の同人社、尺振八の共立学舎と共に、四大私立学校の1つに数えられた。

学農社のカリキュラムは、欧米人が著した英語の本を用いて、農業だけでなく、万国史や万国地理が講じられ、数学と実験が重視されていた。実習指導を行うだけでなく、キリスト教の精神を指導原理として、有益な人物を養成することを目的にしていた。仙に洗礼を授けたソーパー牧師や宣教師フルベツキを招いて、生徒にキリスト教の講話を聞かせた。仙自身もウィーンから帰国後キリスト教に関心を持ち、妻初子とともに洗礼を受け、キリスト教徒になっている。まだその頃は、キリスト教を信ずる者は何らかの乱暴を受けることも覚悟しなければならぬ時代だった。ソーパー牧師の説教のときは平服の巡査が必ず屋敷の内外を警戒していた程だったが、後年、仙自身が述懐しているところによると、

「事実は予想と相違し、何の乱暴はおろか、余がさきに蘭学を学び始めしときほどの事もなかりき」³⁰⁾

ということだった。

卒業生の90パーセントがキリスト教徒になり、キリスト教会で活躍した人も多い。後に『女学雑誌』を発行し、女性の地位向上・権利伸張に努めた岩本善治（1863-1942）もその一人である。当時学生だった岩本は、1879～80年頃の学農社の様子について次のように回想している。

「津田先生は、果実書とか牧畜書とかを持ち出られ、原書から直ぐと翻訳しつつ教へられたもので、私共はエライ英学者と恐れ入って居つたものだ。毎週、討論会がある。演説会がある。毎日肥やし桶を担いだ³¹⁾」

内村鑑三（1861-1930）によると、「津田式の農業」は、「第一に文明流の農業」であり、古説旧習によらず、学説進歩の農業である。「第二に平民的農業」であり、資を官に仰ぎ、位階勲章を以て誇るような役人的農業ではない。「第三に信神的農業」であり、単に産を獲て満足する農業ではなく、「體を養ふと同時に天に徳を積まんとする農業である³²⁾」。

学農社の経営と維持に莫大な費用がかかったことと、政府が1878に農業指導者養成機関としての農事修学場を駒場に設立したこともあり、学農社は1883年12月、創立後10年で廃校することになった。仙が経営した学農社農学校は、日本がまだ西洋農学について未経験な時期に、新農業の発展を目指し、キリスト教の精神に基づき、指定の教育に従事した。官立の駒場農学校の設立により、学農社農学校は、農業啓蒙期における役割を終えたと言えるだろう。

4.5 『農業雑誌』の発行

仙は農学校の開講と同時に学農社の第二の事業として『農業雑誌』の発行を企て、1876年1月に創刊号を出した。創刊号の表紙裏に英語と漢文でジョージ・ワシントンの次の言葉を掲げた。

Agriculture is the most healthful, most useful and most noble employment of man.
 農者、人民職業中、最健全、最尊貴、而最有益者也

仙は、創刊号で「国産を盛大にし、輸出をして輸入をより多からしめ、国家独立の大本を堅くせんと欲する」と述べている³³⁾。最初月刊だったこの雑誌はやがて月2回、さらに3回と発行回数も増え、部数も次第に増加して、ときには万を越えることもあったという。農業に関する西洋の新学説や、実験を紹介し、農業経営の改良法、副業のすすめ、果樹・家畜・外国野菜の栽培法に加えて、農業と政治・経済の問題の論評に及ぶなど、啓発的な記事にみちていたこの雑誌は、全国の多くの篤農青年に歓迎された。小倉倉一は、津田仙を明治の自由主義農学者と位置づけており、仙の『農業雑誌』は、田口卯吉主催の『東京経済雑誌』が経済界で占めたような意義を農業界に持っており、農業の官僚化に対して常に批判的な立場をとったという³⁴⁾。社説「農会の自立を望む」(1888年)で、大日本農会を批判しており、社説「世の豪農有志家諸氏に告ぐ」(1888)では、米作偏重を排して商業的農業を力説しているが、この論調は米作転換論と通じるもので、この雑誌の一特徴をなしている³⁵⁾。

『農業雑誌』は、1908年に仙が死去した後も出版し続けられ、1920年7月、1221号まで続いた長寿雑誌だった。地方の読者の投稿によって支えられた雑誌であり、日本各地の書店で販売された。色川大吉氏は、『農業雑誌』の特色を「自主独立の精神をもった自由な企業農民を育成しようとしたこと」、「商品作物の栽培の重要性をとくに強調し、封建農民を国際社会に生きる新しいタイプの経済人として脱皮させようとしたこと」であるとしている。そして「こうした地道な事業を、政府の力を借りずに独力でやりぬいた津田仙というような人物をわたくしたちは見直さなければならないだろう」と書いている³⁶⁾。

5. 結びにかえて

時代の変化に応じて当時の知識人が西洋の学術・文化・技術を得る手段は、蘭学から英学へと移った。苦勞して蘭学をせっかく学んだのにまた英語を学び直すのは大変だったと思われるが、福沢諭吉は、「数年勉強の結果を空しうして、生涯二度の艱難辛苦と思ひしは大間違ひの話」で、実際のところは蘭語も英語も同じ「横文」であり、文法もよく似ていて蘭書を読む力があれば英書にも適用されるので、蘭学を学んだのは決して無駄ではない、と述べている³⁷⁾。

もちろん現在の学習者とは違い、辞書を手に入れるのも、教えてくれる先生を探すのも大変だった時代に英語を学ぶのは並大抵の苦勞ではないことは確かである。特に発音で苦勞したのは見てきたとおりである。

幕末の動乱時代に身分制度が次第に崩れてきて、下級武士でも能力のある者は、語学の修得などを通じて頭角を現したが、津田仙もそうした知識人の1人である。仙は、当時の一流の知識人を結集した啓蒙の学術結社である「明六社」にも加入し³⁸⁾、機関誌『明六雑誌』に農学の研究論文を発表している。

英語の習得に涙ぐましい努力をした仙だが、幼い頃は古語解釈に重きを置く漢学には興味がわかなかったようである。だが、14歳のとき、ぜんまい時計の針が戻らないことに気づいて、学問に志し、以後、寝食を忘れて勉強するようになったという。これは、勉強には学ぼうとする意欲 motivation がいかに重要であるかを如実に物語っている。

仙は、進取の気性に富んだ人であり、新しいものに果敢に挑戦した。「当地には髪結も無之困却致し候故、斬り取り候」と自分の髻をサンフランシスコから初子のもとに送ったのも象徴的な出来事である。まだ明治維新の前年のことであり、散髪脱刀令（1871年）の出る4年前のことである。仙の斬髪に家族は色を失ったという³⁹⁾。

仙は、明治の自由主義農学者として、一民間人としての生涯を終始した。1908年4月24日死去、享年71歳だった。津田仙は、梅子の父親というだけでなく、時代に先がけて英語を学び、世界に目を開き日本の近代化に貢献した明治の知識人の一人であると言える。

注—————

1) 津田仙「洋学の伝来」『英文雑誌』1巻2号, 31頁

2) 「洋学の伝来」, 32頁

3) 藩主堀田正睦は1855年老中に任ぜられ、老中首座の阿部正弘の施政を助け、外交に専心した。1856年7月に下田に現れたハリスとの通商条約締結の衝にも当たっている。

4) 内田儀久『明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々』, 38~40頁

- 5) 伊村元道『日本の英語教育 200 年』, 10~14 頁。先生となるイギリス人はおらず, 辞書も教材もない手探り状態であったが, 1811 年には現存する最古の英語の手引書が長崎奉行所に献上されている。
- 6) 幕府は, アメリカ駐日公使だったタンゼント・ハリスに軍艦の新造を打診したが, 南北戦争を理由に拒否したため, オランダへ軍艦を発注することになった。
- 7) 「洋学の伝来(中)」『英文雑誌』1 巻 3 号, 58 頁
- 8) 吉川利一『津田梅子』, 32~33 頁
- 9) 吉川, 33 頁
- 10) 津田仙『農業雑誌』1020 号, 208 頁
- 11) 幕府は蕃書調所で蘭学の心得のあるものを教授方に任命しており, 手塚はその 1 人に選ばれていた。
- 12) 福沢諭吉『福翁自伝』, 114~115 頁
- 13) 1823 年蕃書調所の教授となり, 後, 「開成所」の教授手伝となる。明治 6 年明六社に入り『明六雑誌』発行に協力した。
- 14) 「洋学の伝来(下)」『英文雑誌』1 巻 4 号, 85 頁
- 15) 「洋学の伝来(下)」, 86 頁
- 16) 杉田玄白は, 『ターヘル・アナトミア』の翻訳を始めたときの苦労を「櫓も舵もない船で大海に乗り出した」ようなものだと『蘭学事始』で述べている。
- 17) 「洋学の伝来(下)」, 85 頁
- 18) 「洋学の伝来(下)」, 85 頁
- 19) 福地源一郎は, 長崎の医師の息子であり, オランダ大通詞名村八右衛門より蘭学を学ぶ。
- 20) 高崎宗司『津田仙評伝』, 24 頁
- 21) 福沢, 117 頁
- 22) 福沢, 162 頁
- 23) 吉川, 38 頁
- 24) 山崎孝子『津田梅子』, 22 頁 ヘンリー・ハーツホンの娘アナは後年, 仙の娘, 梅子のよき協力者となり, 梅子の塾を手伝った。
- 25) 山崎, 24~26 頁
- 26) 高崎, 122 頁
- 27) ホイットニー・クララ『クララの明治日記(下)』, 203 頁
- 28) 『農業雑誌』1020 号, 211 頁
- 29) 都田豊三郎『津田仙: 明治の基督者』, 53 頁
- 30) 『護教』875 号, 1908 年 5 月 2 日
- 31) 岩本善治「祝辞に代て昔を忍ぶ」『農業雑誌』1000 号, 452 頁
- 32) 内村鑑三「農業と宗教」『農業雑誌』810 号, 290 頁
- 33) 『農業雑誌』創刊号, 3 頁
- 34) 小倉, 40 頁
- 35) 小倉, 41 頁
- 36) 色川大吉『近代国家の出発』, 364~366 頁
- 37) 福沢, 121 頁

蘭学から英学へ

- 38) 明六社は、1873年（明治6年）10月に創設された。当初の会員は、森有礼、津田真道、西周、福沢諭吉、中村正直、加藤弘之、西村茂樹ら当代一流の洋学者だった。津田仙は、1年後の1874年に加入した。
- 39) 山崎, 21頁

参考文献

一次資料

- 津田仙「洋学の伝来」『英文雑誌』1巻2号, 1903年7月15日
「洋学の伝来（中）」『英文雑誌』1巻3号, 1903年8月1日
「洋学の伝来（下）」『英文雑誌』1巻4号, 1903年8月15日
『護教』875号, 1908年5月2日
『農業雑誌』1020号, 1908年5月5日
『農業三事上下』（『明治文化全集』第26巻, 復刻版, 1993年）
岩本善治「祝辞に代て昔を偲ぶ」『農業雑誌』1000号, 1907年10月15日
内村鑑三「農業と宗教」『農業雑誌』810号, 1902年7月5日号
福沢諭吉『福翁自伝』（『福沢諭吉集』）岩波書店, 2011年

二次資料

- 伊村元道『日本の英語教育200年』大修館書店, 2003年
色川大吉『近代国家の出発』中央公論新社, 初版1974年, 改版2006年
内田儀久『明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々』聚海書林, 1997年
小倉倉一『近代日本農政の指導者たち』農林統計協会, 1953年
笠原一男『日本史研究』山川出版社, 1995年
亀田帛子『津田梅子とアナ・C. ハーツホン：二組の父娘の物語』双文社出版, 2005年
金文吉『津田仙と朝鮮：朝鮮キリスト教受容と新農業政策』世界思想社, 2003年
佐倉市教育委員会編『佐倉市郷土の先覚者 津田仙』佐倉市教育委員会, 1996年
杉本つとむ『江戸洋学事情』八坂書房, 1990年
高崎宗司『津田仙評伝』草風館, 2008年
高梨健吉『英学ことはじめ』角川書店, 1965年
古木宜志子『津田梅子』清水書院, 1992年
ホイットニー・クララ『クララの明治日記（下）』一又民子, 高野フミ, 岩原明子, 小林ひろみ訳, 中央文庫, 1996年
都田豊三郎『津田仙：明治の基督者』日本キリスト教団九段教会, 1972年
津田昇編『津田仙翁略傳：昭和33年4月26日津田家記念会の日に』1958年
山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館, 1962年（新装版, 1988年）
吉川利一『津田梅子』中央公論社, 1990年